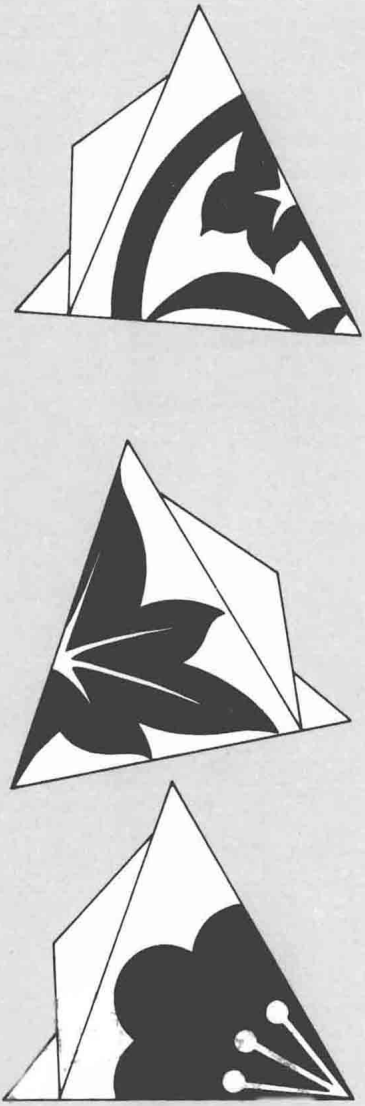
花小説・戯曲選

第一巻



岩波書店

鏡花小説・戯曲選 第一巻　第四回配本（全十二巻）

一九八一年九月二五日　第一刷発行

定価三〇〇〇円

著者　泉鏡太郎

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社 岩波書店
電話〇三―二六五―四一一一
振替東京六―二六三四〇

印刷・三陽社　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 泉名月 1981　Printed in Japan

目　次

冠彌左衞門……一
亂　菊……一四五
黑百合……二三七
解　說……寺田　透……三九七

冠彌左衛門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

星月夜鎌倉長谷の片傍、權五郎景政が社の境内に、小喧しき力聲は、極樂寺近邊の壯佼ども、腕强を擢りて十五六人、いづれ劣らぬ暴くれ男、ぐるりと輪になる眞中には、大小の石二ツ。是や昔景政が、手玉に取りしと言傳ふる、力石を扛むとて、或は肌脫赤條々、繩の腹卷、藤蔓の顱卷なんどに氣競けり。江島參詣の歸途か、五人ばかりの一群あり、客と見ゆる色白男、雪の下の藝者と肩擦並べ、取卷には雛妓、茶屋女、飛んだ荷物は食醉うたる野幇間の亂拍手、哄と噪動いて來りしが、こりや面白しと立寄りて、力試を見物す。

鼻に汗かく血氣盛りは、女の前の見えを飾り、天晴力鼎を扛げて、腕に思ひを懸けさせむ、と先づ一番が登瀧の三九郎、三十五貫の大の方に、諸手を懸けて、うんとこな。遠吠のやうなる聲を揚げて、押せども曳けども埒明かず。代りて出たる猿松は、汗に茹つて眞赤になれど、膝より揚らず引込めば、ちえゝと悔しがりて三番に、目白の胴六同じく駄目なり。

見物の女可笑さに腹を抱へて、行かむとするを、旦那樣もうちつと、と雛妓が留め、まだ中入

前之からが眞打、若い衆頼みます、と幇間が囃せば、若連中やつきとなり、それ覺えのあるのがちやつと出て、二つも一所に扛してくれ、權五郎組の沽券が下る、貴樣やッつけろ、まア〳〵汝が出い、と猶豫ふ處へ、一人が呼んで來た、之は見るから强さうな大の男、向顱卷にてづいと出る。

壯佼ども力身立ち、鐵公來たか難有え、女郎今に見ろ、驚くな。しつかり〳〵、と聲援すれば、件の强者兩の手を丁と拍ち、えいやッと聲の下、苦も無く胸にて支へたり。

幇間扇を颯と開き、喝采〳〵。日本一の强の者……が、おや目を白くした、それ黑くした。舌を吐くぞ、切齒をするわ。と連りに嘲れば、癇癪一時に込み上げて、鐵公は死力を出し、一息入れて腰を捻り、うッといきむ拍子の惡さ！　思はず尾籠を振舞ひければ、さらでも堪らぬ藝妓、雛妓、客も下女も幇間もろとも、腹を抱へて、死ぬる死ぬると笑ひけり。

暫時して四邊を見れば、何時の間にやら、一人行き二人行き、夕日の影は此方等ばかり、機の惡さに遁げたと見える。入らぬ腕立笑止々々と、假聲まじりにさゞめきて、さあ行きましよと退際に、姉樣如何程重量ものだらう、と雛妓が要らぬ穿鑿、力石に手を懸けたるを、社の裏の森蔭に二つ雙ぶ梟の眼、樣子を覗ふ放屁の鐵、十五六人後に立ちて、それ出ろ。とばら〳〵。

あれと遁げる雛妓の小腕、鐵が捻ぢて抱竦むれば、一足先の四人連、これはと驚く間も無く、

大勢にて押取巻き、やい汝、力石に手を懸けたな。誰でも來い、此石に指でもさした奴輩は、赤子でも病人でも、持たさにや置かぬ村の定法。さゝ上げろ、持つて見ろと力任せに小突廻され、雛妓は哭いて詫れども無法者は肯入れず。これさ野暮なことを、よしやれ〳〵。と止むる幇間。汝が一體氣に喰はぬ。と腦天ぽかりと啖はされ、飛出さぬかと目玉を押へてよろめけば、咄嗟と騷ぐ女伴。野郎にも遺恨がある、袋叩きにして了へ。女輩は擔げ、念佛だ。——あれ人殺、助けておくれ。

そりやこそ喧嘩と人の山。女子供を、あれ非道い奴輩だ、弱い方に加勢をしてはやりたけれど、對手は權五郎組の若い者、之にはあやまると、誰も彼も手を束ねて高見の見物。

表が騷がし。何事、と二階の簾を卷き上げて、欄干に半身を現したるは、嬋娟たる孃子と見紛ふばかりの少年なり。高妙寺是空上人が祕藏の美童、年取つて十八歳、其匂やかなる姿には、花も色なく見えにけり。

落花狼藉の光景を、見るよりふつと內に入りしが、あれお危ない皆さん止めて、と媚めかしき女の金切聲、見れば縋りて止むる女を振切り、格子戸がらり、飛出す少年、足袋跣足のまゝ一文字！　暴れものの群がる中へ、容赦も無く猛然と躍込めば、やあ小癪な二才、小指で彈け、と總がかりで哄と寄する時、一足二足身を退きて、ひらりと飛んで、石燈籠の笠石にすつくと立つ、

不思議の早業。さすが前髪は汗に濡れ、鬢の亂れを搔拂ひ、ほと一息して、働き自由ならぬ兩の袂を結ばむとする足下へ、ふわり、丸げて投げたる藝妓の腰帶、咄嗟に綾取る深紅の襷、眞白き腕に麾きて、さあ來い、靈山の卯之助だ。

二

弱い者虐めの疫病の神ども、憎しと思へる見物は、此立役に手を拍ちて、名ばかり聞きたる高麗屋と、どつと崩るゝばかりなり。

卯之助身輕になつて、さあ來いと突立てば、飛んで火に入る夏の蟲、それ捻れ、合點だ。と棒ちぎり、丸太薪など亂るゝ間に、早瀨を潛る若鮎の、小太刀つかうて働くを、二階から覗き、門口に飛出し、階子に坐りて眼を塞ぎ、南無觀音樣。樣子を見てはあれ〳〵と、くる〳〵舞ひして氣を揉むは、餅屋の娘小萩といふ可愛らしき女子なり。

お若衆しつかり負けまいぞ、と口々に加勢して、石を投げ砂を飛ばして氣競ひ懸れば、しどろに亂るゝ五郎組、素早き見物七八人、隙を見て駈け出し、小さくなりて蹈る藝者の群を取卷きて、手足纏ひは働きの邪魔になる、えゝ、禮どころかい、それ逃げろ。

逃げての後は喧嘩に張無く、一人の若衆に駈惱まされ、又仕返しの折あらむ、皆が一まづ退い

た退いた、と臆病風に誘はれたる五郎組、濱邊をさして總崩れ、見物の中へ紛れ籠めば、石を投げたる彌次馬連中、讐さるゝよと打騷ぎ、傍杖喰ふな、と一同に、猫も杓子もちり〳〵ばら〳〵。

汚なし返せと言ひはせしが、素より好まぬ達引ゆゑ、卯之助好き程に追ひ棄てて、悠然と引返せば、四邊は既に靜になるを、見澄して小萩駈け出で、日本晴業お勇しや。まあお怪我は無きか、おせつなかろ、はや家へ來てお休息なされ。あれまあお召が大層に、と染小袖の後前、塵埃はたいて介抱すれば、好いわ、介意な、何とも無し。ちと手拭を貸してたまはれ。汗になつた、と帶にはさめる手拭借りて、衣紋を寛げ、身體を拭ひ、歸山も急げど喉渴きぬ、お茶一つ雜作に成らむ。さあお出。と連立てば、小萩が母親出迎へ、煽ぎたてて手柄を賞め、ともに無事をぞ祝しける。

沖の暗いに白帆も見えず入相過ぎて宵闇の、時雨模樣の秋の空。往來途絶ゆる海岸通、一際黑きは松並木、仄かに白きは流の水、四邊寂寥とする折しも、長谷の方より二人の跫音、一散に駈附けて、閻魔川の下流なる、海岸橋にて立止まりつ。

這個の歸途は慥に此道、不覺を取つた報讐に、天の與へか、眞の暗夜。いつかな鞍馬の御曹子も黑白が見えねば盲目同然。寢鳥を刺すに譯は無え。跫音合圖に後から、鐵、猿、脫心な、合點だ。と寢刃合せたる大刀の、鯉口ぷつり。忍べ。忍べ！

山果庭に落ちて朝三の食秋風に飽き、柴火爐に宿して夜薄の衣寒氣を凌ぐ、と低聲に吟じつゝ、蛇の目の傘、高足駄、海岸橋に來懸る頃、村雨颯と降出しぬ。

來たぞ、來たぞと二人が頷き、大刀の鞘拂ひしてそと寄りつ、やと切り下す劍の冴は、さても見事や傘の轆轤を斜に斫つたりけり。むゝ、稻妻、時候ならぬ。と、不敵の卯之助怖るゝ色無く、悠々として行かむとするを、二才待て。と前後を塞ぎて仁王立。乳の香の失せぬ小童を對手にするも大人氣無し、と捻目にした手落から、思はぬ不覺を取つたる無念さ、遺恨を返しに待つて居た。小峰の猿松。鍛の鐵吉。命はもらうた、觀念と飛びかゝるを、靈山外して空を切らせ、開く處へ鐵が附入り、足を拂へばさしつたり、欄干に手を突羽根や、擬寶珠を飛ぶ牛若丸。下り違ひさま丁と蹴れば、わッ！深みへざんぶりこ。殘る一人は南無三寶、命が種と逃げ失せけり。

來懸る提灯は猿の傳次、怪しき水音と親ふを、すれ違うて飛出す奴、曲者やい。と引摑めば、聞馴れた聲——親分か。いかにも傳次、手前は誰だ。面目も無い猿松で。なに猿松。と放し遣り、水喰うたは何者だ。ありや鐵吉。といふ譯は。內端喧嘩を仕をつたか。いんや對手は靈山卯之助。何、而して何とした。力持から喧嘩を始め、十四五人で見事に負け、親分に合す顏が無ければ、意趣を返さうと鐵と此猿、卯之が歸りを待伏して、ばつさりやつたは傘で、主は手利の足蹴にされて、鐵は川へ落された。危ない所。と身顫ひすれば、おゝ卯之助殿出來された。と傳次は獨り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

悦に入る。猿松呆れて、親分敵を取つては下さるまいか。何の報讐。さほどの手並と聞くからは、今夜にも名乗り合ひ……それよと言ひ捨て行く影を、茫然見送る後から、唐突にわッといふ。あッと驚き振向けば、漸々上つて來たる土左衛門、わな〳〵震へて、えゝ寒いぞ〳〵。

三

鷲が棲む、靈山高妙寺の是空和尚、博學の譽高く、道德の光明かに、遠近渴仰の聖なり。されば迷雲晴れ渡りて、伽藍の棟は神々しく、日想觀の業卒へて、三十の山徒緘默の眼を塞ぎ、打たねば鐘の音も無く、寂寞森と初夜更けたり。

海岸橋を切り拔けて、走り歸れる美少年、閉出されて途方に暮れ、生憎本坊隔りたれば、叩いても駄目なこと。さりとて外泊は寺法の禁制、何とか思案は……おつと有り。左へ曲つて杉垣傳ひ、切戸を押せば卵塔場。何時も戸鎖ぬ太平は、世に無き人の住家かな。何の大姉居士達のお宿の前を過行けば、星の灯落葉の褥。時に雨霽れ雲斷れて、靑照山の叢に月の出汐の最凄く、松風颯と梢を鳴し、浮土を呼ばふ聲すなり。千草に啾く蟲の音は、苔の下なる鼠かや、卒堵婆を照す月影の碎けて落つる葉末の露は誰が亡魂ぞ哀なる。不圖眼に入りたる石塔一基、四邊は尾花の茂り合ひて、いとゞなほ荒れ果てたるに、これにのみ花を手向け、閼伽さへ淸く備へたり。

茂林を潛る月影に、讀めば二行の文字ありて、鋭心院儉俠居士、貞松院妙烈大姉と刻まれたり。無縁の精靈頓生菩提、はからず爰に止まりしも何かの縁と同向して、つと立去るを止むるものは、仔細あつて後を跟け、先より動靜を親ひたる、權五郎組の立物、猿の傳次。呼ばるゝは我事かと振返りて、怪しき人物に油斷ならず、反を打ッて衝と戻れば、傳次退つて兩手を上げ、いえ、大事無い者でえす。早い話が此方樣にぞつこん惚れた男がござる。家田畠は無けれども養子にしたいと强い執心、何と肯いては下さるまいか。さて〳〵希有ないひがかり、我を所望といふは誰そ？　今此方樣が同向を吳れた墓の下なる夫婦でえすわ。やあ、汝狐狸の類で無きか、人を遊んで奇怪な。と權幕變りて鯉口辷れば、ちやつと押へて大盤石、まあ〳〵、わけを聞いて下せえ。

十七年の昔なり。石村五兵衛といへる分限者、利を以て愚民に誑はし、長谷八ケ村の田地を擧げて不相應の高價にて悉皆買はんと言出したり。村人利慾に眼が眩み、二ッ返事で應といふを、地の住人刀鍛冶其名は、と言ひつゝ傳次件の墓を差し示しつ。卯之助寄ッてつく〳〵見るに法名の下に細字あり、俗名鋭鎌利平三十七、同人妻渚二十三。譚は聞いた長谷の義民、名は豫て慕うたり、樣子ありげな言葉の端しなに因らば跡取らむ。委しく聞かせよ。されば其事。此佛、驚く事一方ならず、子孫百代相傳すべき大冥福の田地田畠、榮華を一代に縮んとて何條賣ることやある、と手に唾して發奮し、大義を說きて諭しければ、村人目が覺め、非を悟り、十中の八九心を

ば變へ終ンぬ。石村目算喰違ひ、これ皆利平が爲せる業と、惡み嫉むこと甚しく、佞人輩の常慣にて、目上に取入る妙術あれば、當國の太守が執權、岩永といふ奸物に賄賂して、何卒利平を押片附下さるまいか、一旦二の足踏みたれど、根が愚直なる百姓輩、好言を以て欺き、八ケ村を買占めて、我持分と致す上は、渠等悉くわが小作男、重稅を課し、年貢を增し、思ひの儘に苛げなば、營利は手に取ッて瞬く內、儲は山分と吹込みしに、同氣相寄る岩永手を打つて恐悅し、反間苦肉の術數を以てあらぬ罪を利平に負せ、獄に下して無理往生、遂に死罪に行ひぬ。

傳次銳き目に涙、瞑ッて空を仰ぎけり。突立つたる卯之助下に居つ、些細の事にも激し易き、血氣鬱勃せる年頃の殊に俠なる生得、瞬もせず聞き居たり。傳次やう〳〵言をつぎ、偖此の妙烈大姉といふは、利平が內儀無雙の烈婦、岩永飽迄殘忍にて、留守の間へ捕吏を向け、渚を引立行かんとせし、時は丁度御內儀が豫て娠める左腹、產の氣つかれし折なりしかば、恥かしき身を見られまいと、自殺して果られし、と皆人語り傳ふれど、生落されたる子の行方知るものは更に無かりき。

かく御夫婦が御最期も、素は皆我等の爲。それと思はず其後に又もや石村の望に從ひ、有らゆる田地を賣渡せる、罰は天か當時の難澁、愈々切なくなるにつけ、始めて神よ佛樣よ、と崇むる今は世に亡き人。此傳次幼少より、餓鬼の大將やんちや者、破落漢夥間で賣出して、ちッとは人

に立てられて、名主であらうが、庄屋であらうが、糸瓜とも思はぬ身が、鍛冶の伯父様に心から惚れ、叱られては謝言りました。其人死んで家退轉、仕返しを仕度けれど、何を言ふにも手強い對手、其上傳次が采配ぢや、根から埒が明きやせぬ。遺形見の子は無くとも、志を嗣ぐに足る、好き養子は無いことか、とやう〳〵に探し當てた高妙寺のお若衆樣、此骸骨は、と傳次異體な者を差出して、鋭鎌利平が昔の生首。梟木に懸けられて、由井が濱の鹽風に吹曝されし白髑髏、今いふ通りの履歴なれば、譬へ赤の他人にても、親として恥かしからず。なれども子となるに恥ぢざるものは、此方を置いて外に無し。名家の跡を絶さじ。と思ひ入つたる傳次の赤心、お氣に入つたらなんと此方樣、養子になつては下さるまいか。おゝ、發奮だる言分面白し、傳次媒賴んだ。と草折敷きて行儀を正せば、傳次手を拍ち、目出たいな。鍛冶の叔父さん。三國一の子が出來た。と生たる人にいふごとく、其白髑髏を伏拜みぬ。

四

村名主の六右衛門、表口にのつさりと差合繰らぬ胴謾聲、婆樣内にか。六右衛門ぢや、御意得ましよ。と音訪へば、親娘取膳の箸を止め、あい、居ります。誰方、お這入りなされませ。そんなら御免。と提灯消し、裳はたきて、づか〳〵通る。

膳押片付け手をつきつゝ、これは名主様、お出。夜に入つて急用か、小萩や、お茶を。あい、あい。と口輕に埃拭うて乘せて出す盆ごと取りてぐつと干し、あちや、あちや、これは好いお茶頂けます。ぢたい煎れ人が別嬪ぢやて、澁かろか知らねども、とんと頬桁がちぎれやす。甘露甘露、と騒々し。見れば麻の上下扮裝、ほ、ほ、名主様本式ぢやの。葬禮の歸りかえ。ぷウ滅相な、鶴龜々々。鶴と龜とが婚禮の媒妁役ぢや、やあ、若い者其品これへ。と差圖の下。

壽留女、來舞布、家内喜多留、末廣に偕白髮、千疋包みに水引掛け、目錄添へて恭しく目出度目出度と、二三人門口より持込めば、小萩も母も興覺顏。

其處へ直せば用濟だ、歸れ〳〵。と歸らせて、六右衛門座を正し、結納の驗迄、目錄お目に懸けまする。幾久敷御受納被下べく候。とのべつに饒舌りてけろりとする。母親は屹となり、襟搔合せて膝押進め、聞けば、行逢橋邊に、末社が轉業するさうな。名主様魅入れてかいな、お笑止や。家内に娘は居りますれど、緣組みした覺ござりませぬ。門違か、と遣込むれば、肩をゆつて打笑ひ、うむはゝゝ、咽喉から手を出すほど嬉しがつて居りながら、いやさて、大層な勿體ぶり、今更めて婿殿をいうて聞かすが、振附くな。雪の下の白銀と名に轟いた石村様、御祕藏の一粒息子、岩永様に奉公なされて、滅法な御氣に入り、祿高は千五百石、石村次郎藏といふ御方、どうした風の吹廻しか、御緣組遊ばさるゝ、媒妁は誰あらう、長谷村名主六右衛門。と扇で膝を叩き

けり。

小萩はハッと胸を打ち、あゝ何時ぞや江の島の歸途とて立寄られたお武家、お茶汲んで出す手を取られた嫌否らしさに、悚氣ふるひし覺えあり。後に聞いて石村の息子と知り、毎夜夢に魘さるゝ、蛇よりも嫌な人。えゝどうせうと、とつ、おいつ。

母親の袂をそつと曳き、目で物云へば飲込んで、なう名主樣、其事は先達て、お耳打ござりましたが、あれほどの御大家と、御寵の通りの此方等風情、何しに緣が結ばれませう。唯御座興と存じ、肝心の娘にも、まだ談話さへいたしませねば、いづれ其內申し聞け、斯個の胸も聞いた上、お返事を致しましよ。ともかく今夜はお開きなされて、結納の品物をお引取りくだされまし。

いや待たれぬ、延引されぬテヤ、手ッ取早いが當世ぢや、氏無くて乘る玉の輿、不釣合ひもなんにもない。はて、六右衛門が飲込んだ。と何でも飲込む開いた口、早合點も又癖なりけり。いや小萩は母が嫁りませぬ。はて、何故とや。斯個は家の米櫃娘、人樣に嫁げましては、婆々が途方に困ります。と皆までいはせず。おつと、其も飲込んだて。娘を差上さへしたら、阿主は大事な姑御、隱居料として十五人扶持、相違無く下さるゝ。何というても六右衛門ぢや、脫落は無かろ。と、したり顏。

どうやら根深に巧んだらし、一通では、と胸を据ゑて、御志は難有けれど、扶持も榮燿も要

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com